

## いい思い出に感謝

——渡辺久雄先生を偲んで——

川 崎 敏 子



子供のころから地図を見るのが大好きだった私は、専攻ゼミは、迷うことなく歴史地理学の渡辺久雄先生に決めました。許可をいただきに、恐る恐る先生の研究室のドアをノックした時のことは、今でもはつきりと覚えています。一九七九年のことでした。研究室に入りますと、そこにはおだやかな初老の先生が座っておられました。選択の理由

などを聞かれた後、すんなりと入門を許可していただき、晴れて渡辺ゼミの一員となることができました訳ですが、その時は、先生とのご縁がその後二十年近くも続くとは想像もつきませんでした。

渡辺ゼミの思い出は多々ありますが、神戸女学院構内での測量実習や写真撮影の実習、兵庫県村岡町での社会調査、蒜山高原を始め、鳥取砂丘、金沢、城崎などへ行ったゼミ旅行等々印象深く残っています。何事も机上の知識だけで判断せず、現地へ赴き自分の目で確かめることが大切であることを、フィール

ドワークを通して教えられました。

私が渡辺先生とより近しくさせていただくようになったのは、むしろ大学を卒業してからのことです。一九八八年、史料室でお手伝いをするようになったのです。先生は、当時史料室の顧問をされていました。約一年間、週一回ですが、再び女学院の美しいキャンパスに通うことになり、学生時代の気持ちがよみがえり、懐かしくまた楽しい一年でした。

先生は十時三十分になると必ず聖書と讃美歌を持って、私を礼拝に誘われます。敬虔なクリスチャンである先生は、実は大の音楽好きで、讃美歌を歌うのも楽しみだったようです。そしてきっかり十二時になるとランチタイム。メニューは定番のサンドウィッチ。先生も私も大の紅茶党で、紅茶のことになると話が尽きません。先生が史料室にストックしていらつしやる紅茶の中から、今日はダーズリンにしようか、アールグレイの方がいいかとひと通り議論(?)した後で、私が淹れた温かい紅茶を一口お飲みになり、いつも「うーん、実にいい香りだね」とおっしゃっていました。そんな時の先生の幸せそうな顔は忘れられません。グリーンウッドにあった史料室は、私にとって紅茶の香りに満ちた思い出深い場所となりました。

その後も、先生とたびたびお会いする機会がありました。元ゼミ生たちが集つての神戸女学院での恒例のお花見。ご自宅で山のような先生の蔵書の整理のお手伝いもしました。大好きな宝塚歌劇にご一緒したこともあります。先生との思い出は数え切れないほどたくさんあります。

しかし、思い出というには余りに最近のことなのですが、やはり先生がお亡くなりになる前の二年間のことが私の心に一番深く残っています。

一九九五年一月、あの阪神・淡路大震災で西宮の住み慣れたご自宅を離れなければならず、豊中のマンションに移

られたご夫妻でしたが、転居の直後、奥様が突然倒れられ、一年近い闘病生活の後亡くされました。一九九六年二月、豊中カトリック教会での奥様のお葬式でお会いした先生は痛々しく、弟の武雄さんに支えられてようやく立っていられるほどでした。なんとか先生を励ましたいという気持ちで一杯でしたが、一体どうすればよいのやらと思いついて悩んでいる時、思いもかけず先生からお電話をいただきました。ちょうどお葬式から二週間後のことでした。

「川崎さん、ワープロを教えてくださいませんか」。私は驚きました。まだ先生は深い悲しみの中にいらつしやろと思っていたからです。さつそく豊中のご自宅まで伺い、少しお元氣になられた先生のお顔を拝し、ひと安心しました。それから週一回、私は先生にワープロを指導することになりました。ある時先生は私に「私は死ぬのはちつとも怖くないんだ。天国で神と共に妻が待っているから」と洩らされました。その言葉に至るまでの先生の気持ちを考えると、私は胸が熱くなりました。先生の立ち直りの早さはひとえに先生の信仰心によるものだったのです。

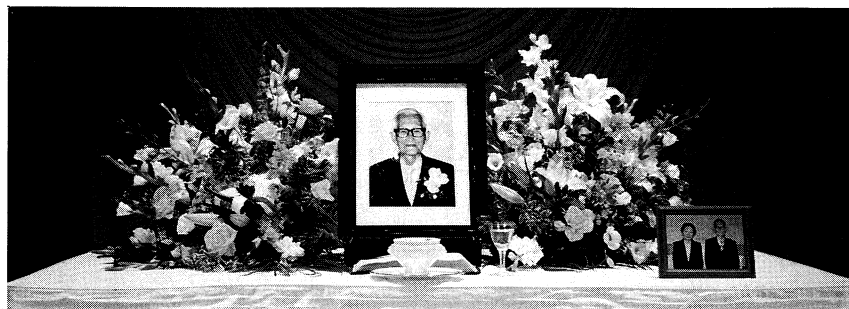
その後の先生は、驚くほど意欲的になれました。弟さんの勧めもあって、ご自宅でゼミを開講することになったのです。受講生は女学院の元ゼミ生たち。第一回のテーマは『魏志倭人伝』です。卒業後見ることなかった漢文を順番に読まれ、全員四苦八苦、冷や汗ものです。それにひきかえ、先生は本当に生き生きしておられ、教育者としての姿に戻られていました。びつしり一時間から一時間半の講義の後には、楽しいランチタイム。先生を囲んでの懐かしい学生時代の話に、会話はいつもはずみしました。

先生の前向きな姿勢は、これでは終わりませんでした。本を書きたいとおっしゃるのです。テーマは『山村の通婚圏からみた姉女房婚―鳥取県三朝町大谷地区の場合―』。以前、矢木公子先生と研究された内容を再度調査してみたので、私に手伝って欲しいとおっしゃるのです。そして私の前に出されたのは、当時の研究発表のコピー。「川崎さん、これを読んでおいて下さい」。私などとても無理ですと辞退する間もなく、一泊の現地調査に三朝町まで同行

することになりました。思い立ったらすぐに行動される先生は、間もなく米寿ということを感じさせないほど若々しく、私はただ後についていくといった具合でした。

三朝町では、以前に先生が調査された時お世話になった三朝町教育委員会の方や町の方々に久々にお会いになりましたが、皆先生のことをよく覚えておられ、行く先々で親しくお話をされていました。私も三朝町を訪れる前に先生から町の方々とのいろいろなエピソードを伺っていたので、誰がどの方がすぐにわかりました。その時感じたのは、先生は人と人とのつながりを本当に大切にされていることでした。ただ研究のためだけでは、ここまで溶け込むことはできない。先生がこの町を愛し、この町に住む人々を愛したからこそこれ程の信頼関係が成り立っているのだと。それは、三朝町に限らず、私たち教え子を始め先生が接したすべての人々に対していえることだと思います。先生は「どんな人にも良いところは必ずある。それを認めることが大切だよ」とおっしゃっていたことを思い出します。その言葉を実践され、すべての人々に平等に接し、愛された先生の包容力に満ちた人間愛を感じずにはいられません。三朝町の研究はその後白石太良先生も同行され、資料もすいぶん収集されたのですが、残念ながら執筆までには至りませんでした。しかし、私にとってはこのように最期まで常に前向きでいらっしゃったお姿に接することができたのは、何ものにも代え難い先生からの贈り物のような気がします。

渡辺先生が中心となって発刊された『学院史料』創刊号の巻頭で、先生は二百年史刊行の準備体制に入り、史料の整備と編纂事業を開始せんと史料室の意気込みを語り、史料ひとつひとつの積み重ねの大切さを説いておられます。先生にとって『学院史料』には特別な思い入れがありだったことでしょう。今回のこの稿にはほとんど表わせませんでしたが、渡辺先生と私との関わりには、淡々とした中にも縁の不思議さを感じさせられる場面が多かったと思い



故 渡 辺 久 雄 先 生 を 偲 ぶ 会 に て

ます。近く創立百二十五周年を迎えようとする時に、この『学院史料』に渡辺先生を偲ぶ思いを記すのは、私にとってあまりにも厳しい縁となりました。天国で安らかに憩う先生と奥様にこの思い出を綴る拙文を届けたい気持ちに駆られます。いい思い出に感謝します。

(神戸女学院大学・九八回生)

#### 故渡辺久雄先生略歴

お生まれは一九一〇年八月十九日。一九三四年五月、関西学院教会にて受洗。

一九三四年三月に京都帝国大学文学部史学科(地理学専攻)を卒業後は関西学院中学部、同大学、長崎高等商業学校、熊本県立山鹿高等学校、大阪市立大学で教鞭をとり、一九七一年、神戸女学院大学文学部社会科学教授に就任。但しそれ以前から長らく非常勤講師として御奉仕下さった。

『神戸女学院百年史』発行に際しては編集委員として尽力、また総説第九章「学院の現状」を執筆。史料室と京都の河北印刷株式会社との御縁がここから生じた。一九七七年、定年退職後は特任教授となり、一九八一年からは神戸女学院顧問、神戸女学院史料室初代室長として史料室の機関誌『学院史料』を創刊し、「神戸女学院史料室規定」を整備。『岡田山の五十年』の刊行も先生の御業績である。一九八九年、神戸女学院を退職。

一九八八年七月十八日、逝去。葬儀は最晩年に転入会された豊中カトリック教会において行なわれた。そして今年七月二十日には各学校で先生の教えを受けた方々の有志が集い、先生を偲んで墓参りと記念会(於・宝塚ホテル)が持たれた。讃美歌と感銘深い思い出話で一杯の美しい集いであった。